

人間にとって農業とは何か

開催日：2016(平成28)年5月21日

場 所：本願寺聞法会館

龍谷大学農学部長

末 原 達 郎 教授

二〇一六年五月二十一日、龍谷顕真会公開講演会が開催されました。

「龍谷顕真会」は、浄土真宗本願寺派の僧侶で、公職選挙法に基づき公選された地方公共団体の議会議員および長並びにその経歴者によって構成されています。昭和四十九年に結成以来、僧侶として聞法につとめ、会員相互の連絡提携を密にし、宗門の組織的な社会的実践活動に寄与することを目的として活動し、一昨年には結成四十周年を迎えております。

市町村合併や社会環境の変化により、最大七十六名であった会員も現在三十一名に減少しておりますが、独自の活動とともに、国会議員の門徒などで構成される「築地聞真会」との懇談や、鹿児島別院や鹿児島教区内寺院の門徒で、鹿児島県選出国会議員及び県議会・市議会議員などで構成される「本願寺鹿児島別院顕真会」、また、東京都議会議員で構成され昨年結成された「築地敬親都会」との交流も始めたところです。併せて、国内外の研修会や公開講座、意見交換や情報共有につとめております。

さらに、昨年からは、二〇一一年に設置された龍谷大学政策学部とも地域公共人材の育

成や政策立案を学び、連携協力を深めております。そのような中、昨年は、富野暉一郎氏（龍谷大学名誉教授・元逗子市長）より講演いただきました。

今年度は公開講演会とし、末原達郎氏（龍谷大学農学部教授・農学部長）に講演いただきました。冒頭では、赤松徹真氏（龍谷大学学長）及び石田徹氏（龍谷大学政策学部長）より挨拶をいただき、引き続き、約六十分のご講演をいただきました。講演内容は、日本農業や食の現状、仏教と農業に共通する考え方、龍谷大学農学部をめざすものなど、農業を中心として日本社会の現状と課題に関わる内容でありましたので、広く学びを深める意味からその内容を掲載いたします。

また、宗門では、宗門総合振興計画の『基本方針Ⅱ 宗門の基盤づくり』の中で、「持続可能な寺院のあり方を検討、運用」すること掲げています。その事業の一つとして、「都市と農村の接点づくり」「人の交流」などから「寺院・地域活性化」への派生効果に向けた龍谷大学農学部のインターンシップ受け入れを寺院で行う連携を進めております。その内容については、本号28頁をご参照ください。

講師紹介

末原 達郎氏

(すえはら たつろう)

龍谷大学農学部教授・農学部長



■プロフィール

1951年、京都市生まれ。

京都大学農学部卒業。

京都大学大学院農学研究科博士後期課程満期退学。

京都大学農学博士。

富山大学助教授、京都大学大学院農学研究科教授（食料環境経済学科長、生物資源経済学専攻長）を経て、2014年4月より龍谷大学経済学部教授・農学部設置委員会委員長。

2015年4月より龍谷大学農学部教授・農学部長。

■専門

農学原論、比較農業論、食料人類学、アフリカ研究。

■著書

- ・『人間にとって農業とは何か』（世界思想社）
- ・『文化としての農業・文明としての食料』（人文書館）
- ・『赤道アフリカの食糧生産』（同朋舎出版）

■編著

- ・『アフリカ経済』（世界思想社）

■共著

- ・『農業問題の基層とは何か——いのちと文化としての農業——』（ミネルヴァ書房、2015）
- ・『食と農の教室① 知っておきたい食・農・環境 はじめの一步』（昭和堂、2016）

日本農業は危機に直面している

龍谷大学農学部長をしております末原達郎です。「人間にとって農業とは何か」を講題に掲げました。現在、日本農業は危機に直面しています。特にTPP（環太平洋戦略的経済連携協定）の問題ですが、それだけに留まらず、日本の社会は大きな問題を抱え、基盤的な構造が大き

く揺らいでいます。

日本の文明社会の基盤をつくってきたもの、それは食と農でした。この基盤である食と農が、現在根本から変化もしくは崩壊しようとしております。今後どう対応していくかをよく考える必要があります。

しかし、危機は、チャンスでもあります。日本社会の中で問題を解決していく努力が必要です、社会システム自体を

より持続的で、回復力のあるものにする必要があります。可能性はあります。何をすべきかを今、考え始めるべきだと思います。

まずは、われわれの社会の基盤を支えるものとして、農業を見ていく必要があります。TPPをはじめとする仕組みは、すべてを市場やマーケットに委ね、海外から輸入すればすむという議論があります。しかし、日本では食料を生産し供給しています。日本は都市型の社会ではありませんが、都市国家ではないのです。日本には、1億を超える人口と国土という領域があり、市場システムだけでは、すべてを解決できないというのが、TPPが抱える問題点の一つです。より大きな視点で、今後どうやって新しい社会をつくっていくのか、子どもたちの世代、さらには孫の世代の社会をどうつくっていくか、食料を考え、農業をどのようにすべきか考える必要があります。

食料と農業を一体の問題として捉える

龍谷大学で農学部を開設して特に感じたことは、これまでは食料政策や農業政策は、農村の問題として捉えられてきましたが、今は都市に住む人も、食料政策が重要だと考え始めているということですから。都市に住んでいる人が自分の食料をどうするのか、自分の家族の食料をどう支え、どう保ち、それを50年後、100年後に続けていくにはどうすれば良いのかを考えるようになっていきます。

したがって現代では、都市や農村という枠組みをこえ、一体となって農業問題を考える必要があります。農村だけが農業問題を考えてはいけけない、むしろ農業問題は国民の政策であり、市民的な政策でもあるのです。

逆に、食料が滞るか否かは、基本的人権の問題です。農業問題としてだけでなく、食料と農業、一体の問題として捉

えるべきです。農村や農家にとって、都市の住民を味方にできるチャンスでもあります。都市の住民が、農村の人たちと問題を共有して、解決の方向に進むべきです。

そこで、私たちは食料と農業を分断するのではなく、結び付けて考えることを強く意識した農学部をつくろうと考えました。しかも日本の農業は世界の農業とつながっています。食料問題、農業問題は国内に限定する時代ではなく、輸入や輸出を通して、世界規模の問題となっています。それを認識し実感として捉えられる人が必要です。

食料が足りなくなれば外国から輸入すればいいだけではすみません。輸出する相手側の国の生活もやはり考えなければいけません。世界には多くの飢餓人口があります。その食料もどうするのか、世界全体としての動きを考えなければいけません。

日本の農村社会のしくみ―「講」と「結」

私の研究は農学で、特に農業経済学で卒業論文を書き、ゼミは、農学原論という分野でした。農学原論は、英語でいうと Philosophy of Agricultural Science になります。「農学という科学の哲学」です。つまり、どうやって農学というものを進めていくのか、これからどこへ進んでいけばいいかを考えるのです。非常に哲学的で、思惟的な世界ですが、私はその研究をフィールドワークに基づいて進め、日本の農村を研究対象としました。岐阜県にある小さな村に出かけ、水田稲作以前から続く焼畑という畑作の村の研究をしたのです。

その時、初めて報恩講に参拝しました。もともと都市にあるお寺の報恩講に祖母が参っていました。農村のお寺の報恩講は初めてでした。岐阜県郡上郡の村の報恩講で、お勤めの後、お斎を参拝者と一緒に行いました。おかずは



贅沢なものではなく、大根の炊いたものや、お漬物などで質素でしたが、ご飯が山盛りで大変驚きました。おそらく、昔から報恩講の機会にご飯が食べられることを、とても重視していたのだと思います。

なぜ報恩講に参拝したかという、講の研究をしたかったからです。講は、農村社会の中で、最も中心的な社会組織をつくっていました。家と家をつなぐ血縁

としての一族の関係とは別に、横につながる関係です。報恩講を中心として、この村の伝統的な社会組織の研究を卒業論文にしました。

さらにもう一つ、「結」というものがありました。現在、日本の村ではあまり残っていないと思いますが、労働力を助け合う、共同して助け合っていくという相互扶助の組織です。

田植えも、「結」でないと動かない側面があり、一家の労働力だけでなく周りの人たちの手を借り、助け合いながら回していくのが「結」です。非常に長期的な力で、相互扶助の仕組みになっていました。

結局卒業論文は、「伝統的村落組織の変容とその現代的意味」としました。具体的には結と講の研究ですが、家を中心にしたネットワークが、どうやって横につながるのか、そして、地域社会を形成しているかという研究です。その一部は、NHK出版から『環境と文化』として出版しました。

沖縄の互助組織ユイマールの研究

その後、大学院に行き、沖縄の多良間島をフィールドに、家と家との結び付きに関する調査をしました。ここにも共同して助け合う組織である結、ユイマールがありました。しかし、そこに市場経済が入ってきて、市場経済化されていきました。社会全体が市場経済化の中で変容していくプロセスを研究し、市場経済と社会との関係を調査する結果となりました。今、TPPの問題で、安いサトウキビの輸入が問題となっていますが、この時は現代の農業問題につながるとは想像もしていませんでした。

アフリカ農民の研究を通して

次に大学院の博士課程に入って、熱帯雨林の国コンゴで、アフリカの農業と食料の研究をしました。

アフリカの農業の研究をすると、農業

以外のことをしている人たちとの関係が見えてきます。狩猟採集する人たち、牧畜をする人たち、そして都市に住んでいる人たちなどと農業をしている人たちの関係、それらを学びながらフィールドワークをしていました。

アフリカの内地部にあるコンゴは、当時、ザイール民主共和国といいました。アフリカは、70年代は飢餓の大陸といわれ、餓死者^{がし}がたくさん出ているということとを問題として、研究を進めましたが、実際は必ずしもすべてが飢餓ではなく、都市には食料があり、農村もわれわれが考えているような状態ではなかったのです。

農村における食料はイモ類を中心に成りたっていました。基本的な食料は、自分たちでつくり、自分たちで食べるという生産消費型の仕組みができて上がっており、むしろ飢餓は少ないのが実情でした。

この時、さまざまな農業を見ましたが、中でも女性の共同労働のような組織

があり、日本の田植えの「結」と同じような形でした。つまり、小規模な仕組みの中で農業を回そうとすると、家と家との結び付き、女性と女性の結び付きが必要です。ただし、日本とアフリカの「結」の決定的な違いは、家を単位としているか、個人を単位としているかでした。アフリカでは個人を単位としています。日本は、家を単位として、労働力をやりとりしています。

現金が必要なのは週1回開かれる定期市の時だけでした。市場以外の日は、自分でつくったものを自分で食べるのです。こういう社会は、飢餓や飢饉^{きん}のときに耐える力があります。もし、すべて商品作物、例えばコーヒーばかりを植えている国でしたら、そうはいきません。一度現金に換えてから食料を手に入れる国では、飢餓や飢饉がよくあります。

また、農民だけでなく狩猟採集民の研究もしました。農民と違い狩猟採集民は、ものを持ちません。蓄積という概念がなく、ストックしないのです。その人

たちがやがて農業を開始すると、土地を利用することになり、農業と狩猟採集とは違う社会の見方ができます。

狩猟社会は、ものをすべて共通に分ける非常に平等な社会です。ところが、農民になると、土地を持ちます。土地を持つと、ストック（蓄積）があり、どうしても格差が生じます。理念的には平等社会であっても、現実には格差が生じてくる。特に土地を持っている人と、土地を持っていない人との差が出てきます。

しかもアフリカの農民は、しばしば飢饉に襲われるため、平等化への動きがあり、常に格差を是正するような仕組みをつくり出しています。例えば労働力を利用するにも、ある人が特定の労働力を集めるのではなく、お互いに順繰りに回していくような、日本の「結」と同じような仕組みです。Ikiimba（リキンバ）という現地語にあたります。単身の女性が労働力を獲得しようとするとき、自分たちの力だけでできないときに労働力を提供する、贈与するという仕組みもまた

同じように、リキリンバ（結）という言葉で呼ばれていることがわかりました。

このように、狩猟採集民と比較しながら農民や農業を考えていくと、一方では格差が広がる可能性があり、一方で社会を平準化、平等化するような仕組みと、両方がありました。

さらに、狩猟採集民から農民に変わると、食料は安定するので非常に単調な生活になります。今でも農業をしている人たちは、ごく少数の種類の食物に依存して生活を始めなければなりません。人間の持っている食物に対する多様性を受け入れ、その中でも効率のいい農産物に依存して生きていくことになることが、アフリカでの研究を通してよくわかりました。

つくり手が見えない——食料と農業の分断

農業や食料の重要性に気付いたのは日本に帰ってからです。特に日本の社会では食料と農業が分断されていることに驚

かされました。

例えば、昔、京都の街中でも、上賀茂^{かみかも}の農家の方々が農作物を荷台に積んで売りに来ていました。「振り売り」といい、常に食料と農業との結びつきを意識させられ、この季節に何を食べるかということ意識しながら暮らしていました。時代を経ると、八百屋さんやスーパーの売り場で、少ない情報で判断するしかありません。これは、不可視化をする仕組みで、現場で取れた農作物が自分たちの口に入ってくる実感が持てず、つくり手と食べ手の間を寸断する形になります。流通や卸^{おろ}しの力が増し、論理としての市場経済化が進展していました。

都市の住民から見れば、農業というのは、はるか向こうにあり、見えないものになりました。人間にとって、食料はとても大事でこだわりますが、食べ物をつくっている現場が全く見えなくなりました。市場経済化の進展が、農産物を見えなくしていく仕組みになったと思います。

食と農を再び結びつける農学をめざして

このような問題を解決するには、見えるようにする、「見える化」が必要です。自分の身体をつくっている食事と、農産物を産み出す農業とを結び付けて考えることができる仕組みです。

農業の分野で昨今、川上と川下を結び付けるとよく表現されますが、もう少し深く人間の身体をつくっているもの、食べ物がどうかたちで、どこでつくられて、どのように育ち、自分の食物となっているかを、はっきりと見える形で捉える必要があるでしょう。

最近フードシステムとも言われていますが、もう少し人間の根源的な姿から考えると、フードチェーンになります。英語では food chain^{しよくもつれんさ}といい、食物連鎖のことです。フードチェーンの両端には食べ手と作り手があり、その社会を形成するのが、市場的メカニズムです。

食と農を結び付け、一体化して捉える農学

- ▶ 見える化をしよう。食と農を結び付けよう。
- ▶ われわれの身体と、食事と、農産物と、それを生み出す農業とを結び付けよう。
- ▶ 流通で考えれば、川上と川下を結びつけること。フードシステムという。
- ▶ しかし、それでは、人間の本性が隠れてしまう。
- ▶ あえて、フード・チェーン（食物連鎖）として、とらえ、表現する。
- ▶ フード・チェーンの一方に、食べ手があり、一方に作り手がある。
- ▶ それらが一体として、食料・農業問題に挑む。
- ▶ 市場経済化による分断に対する再構築。食料危機の現代だからこそ、可能になる。
- ▶ 農学部を、新たに開設する意味にもなる。

そこで、市場化による分断をもう一度再合成して、目に見える、自分の身体としての実感と農業とをつなげる仕組みとする、農学部^{ひそ}の開設が重要でした。

農学部^{ひそ}の開設には、さまざまな議論があり、最終的には大学執行部が決定しました。日本の大学の農学部は、密かに

農学と仏教に共通する食の考え方

大していましたが、「農学」を名乗らなかった。資源生物科学部や、バイオテクノロジー学部など、農という問題に触れずに、技術だけで行動したところがあります。しかし、技術だけで何が解決できるのかという基本的な問題がありました。

食べ物に対する基本的な関心は、私は、農学と仏教では共通していると思います。人間の身体は、光合成ができません。つまり、太陽の光を浴びて、自立的に生きていくことができない存在です。

自立的に生きられないので、光合成ができる植物か、植物を食べた草食動物をいただくしかない。そうして、われわれの身体はできているのです。光合成のできないわれわれは、生きていくためにどうしても必要なエネルギーを獲得するため、動物もしくは植物の命の、いずれかをいただくかないことには、生きていくこ

とができません。それによってようやく自分の命をつなぐことができる存在です。この事実から目をそらすことはできません。

生命を考え、食を考える以上、さらに踏み込んで農業のことを考えざるをえません。このことを基本に考えて、大学執行部は、農学という名前を前面に出していこうと考えたのだと思います。決して、多くの大学にあるバイオテクノロジー学部でもなく、資源生物科学部でもなく、農学部として、理念をもって立ち上げようとされました。私立大学では35年ぶりの農学部の開設でした。

一方で、「農学部」ではたして学生が集まるかというリスクもあり、不安でした。しかし、実際には、募集の結果、非常に反応が良かった。多くの学生自身、また40代、50代の学生のご両親からの反応もとても良かった。農村出身の学生や、高校で農業を中心に勉強してきた学生も来しました。400人の募集に対し5、1

仏教・食・農業・農学

農学者から見れば、

- ▶ 人間は、食べなければ（消費しなければ）生きていけない存在。
- ▶ 人間は、光合成をすることができない。
- ▶ 植物や、動物の、それぞれの生命を頂戴して、ようやく自分の命をつなぐことができる存在。
- ▶ この事実から、目をそらすことができない。

仏教的考え方とも合致する。

- ▶ 人間は、植物の命、草食動物の命、肉食動物の命をいただいて、生きていく。
- ▶ 生命に対する畏怖と尊厳と感謝をもち、その上での「顕真」真実を明らかにする。
- ▶ 生命を考え、食を考える以上、さらに踏み込んで、農業のことを考えざるを得ない。
- ▶ これは、農家だけではなく、人間一般に通底することがら。

00人余りが、1年目に受験してくれました。農業、農学に興味を持っている人が少なくないのです。今までバイオテクノロジーなどと「農学」を隠してきましたが、現在こそ、食と農の問題が重要だと思っている人、意識している人たちがかなりおられるということです。

2年目も昨年を上回って5、500人余りの受験がありました。

龍谷大学農学部の4学科がめざすもの

農学部では、植物生命科学科、資源生物科学科、食品栄養学科、食料農業システム学科の4学科を設置しています。

まず概要を申しますと、植物生命科学科は、植物とは何かということを考える学問です。資源生物科学科は、農業と本来の農学が中心の学科です。果樹園芸学、作物学、土壌学等があります。

食品栄養学科は、管理栄養士を育てる学科で、病院や企業の食堂などで、栄養の判断をしたり、食事のメニューを考え提供する人を育てます。どういう栄養、食物を取って給食や、病院食にするかということを考えます。

最後に、食料農業システム学科は、経済学、経営学や社会学から農業を学ぶ学科です。

この4学科を一体として、農学部を立ち上げようとしたわけです。

植物は、そのものの性質も大切です。どうやって増やし、農地で育てるか。そしてどういう食事へと農作物を利用するか、さらにそれをどうやって販売するかということを学びます。市場経済はさまざまな問題点を含んでいますが、現代では経営や市場のことを知らないで、これからの農業はやっていけません。

でき上がったものを、すぐJAに売るだけでは、これからの農業経営者は生きていけません。各地のJAも、さまざまな工夫が必要となってきましたし、各地域社会でも知恵をはたらかせる必要があります。同時に農業経営者も自分の知恵をはたらかさなくてはいけなくなります。

こうした四学科を一体として捉え、学べるような農学部をつくろうと思えました。

具体的には食の循環として、生産から

加工、流通、そして分配、販売までの仕組みを実習として学ぶことです。

植物生命科学科はバイオサイエンスであり、最新の科学の知見をえることは必要ですが、果たしてそれだけで良いのかということ、植物の生命に関する問題として捉えています。

資源生物科学科は土壌学や作物学です。他の大学では、ものの生産力を高めれば良いと考えられていました。しかし生産を高めればそれで済むかというと、そうではありません。どのように作物は循環していくのか、例えば反収が倍になる米をつくったとしても、どのように商品として売っていくか、あるいは倍にできる品種をどのようにすれば、環境保全的でありえるのかを考えなくてはならない。決して生産量や生産効率を良くするだけでは問題解決はできないのです。

食品栄養学科は、管理栄養士になる人が畑へ直接出向くことが可能になり、1回生から全学生が田んぼや畑で実習をしています。管理栄養士は、食材になる商

品を、どこで、どうやって手に入れるか、どれだけの量を確保できるかということ、これを、これまでは見ていましたが、さらに進んで、どういう作物がどのように作られているかを知っておくことができます。単に市場で並んでいる農作物を見て、栄養学のことを語るのか、それだけではなく、農作物がどういうプロセスで、どこでできてるのか、それぞれの土地でどういうふうに育てられているのかを語れる管理栄養士を育てることは食育上大きな意味があり、とても大事なことであり、本学の狙いでもあります。

食料農業システム学科では、経済、経営、社会学の分野にも及ぶものです。農業は経済の仕組みも知っておかなくては いけません。作るだけ作ったら良い時代ではなく、いかに売るか、また、売るために、あるいは輸出するためには、どういう税金や、輸入規制がかけられているのか。例えば、ヨーロッパは鯉節が輸入できません。鯉節をヨーロッパに輸出す

るためには、どのような手続きが必要か。そういうことも含めて考えなくては いけない。あるいは流通の問題で、食材をどれだけ保存し、どういうかたちで外へ出していくか。今後もし変化し続けますが、考えている以上に、食料の流通の技術的な革新は大きいと思います。

食の循環実習

昨年5月に田植えをしました。1年生の授業で食の循環実習というのがあり、後期から農作業をするため作物を最初に植えておく必要があります。1年生と、地元の人たちと、教職員がボランティアで田植えをしました。そのとき地元の農家の方が、今までは着ていなかった早乙女さおとめの服を着て田植えに参加されました。これは若い学生がいるからです。私も学長も一緒に田植えをしました。こういうことによって、地域は活性化していきます。さて、学生は、実習でようやくお米を収穫することができました。そして加工

することが出来ます。食品栄養科では食品として料理をつくって食べ、加工品をつくります。

また、田植えをした農場の近くの集落では、渋柿で非常に水準の高い干し柿をつくっておられました。これまでやめようという話もあったそうですが、学生ボランティアを動員して、作業も技術も教えていただき、売れるような干し柿にしようとしています。消えるかもしれない作業や技術も、学生を通して伝承していくことが可能であることの証^{あかし}となりました。

学生はいろんな作物を使って、座学のみならず、それをいかした物をつくることに非常に喜びを感じています。循環の体系は、作物を植えて、育てて、収穫して、加工して、自分で食べる。そして、やがてまた土に返され、また新しいものを育てるということになります。全体の循環を学ぶのが龍谷大学の農学部の大きな特徴の一つです。深い視野で循環を学

ぶことができるのは、仏教系大学の特徴であるかもしれません。

もう一つ重要なことは、早い時期に、食と農の倫理を教えています。サイエンスは、知的探究心で進化しますが、行き過ぎることもあります。一度立ち止まって、いったい自分が何をしているのかを考えるためには、倫理の問題を早い時期から教えることが必要になってきます。その上で基礎科目、関連科目、専門科目を設定して、自分たちの卒業研究につなげます。

世界で活躍する人材の育成

まだ農学部には2年生までしかいませんが、すでに彼らが卒業後、社会で活躍することを考えています。農学部は、農業を担^にう人材を産み出しますが、関連産業がたくさんあることを知ってほしいのです。

農業の味方となる流通業が必要です。販売・サービス業も必要になる。幅広い就職先を前提にした農学部でありたいし、場合によっては、税関に勤める人や研究者になる人もいるかもしれない。つまり、農家だけのための農学部ではなく、社会全体に対して役割を果たしている農学部をめざします。農業は社会の基本構造をなしているので、幅広い就職の中で支える人材を輩出したいと思います。

学生は農業の話は身近ではないと感じていたかもしれませんが、例えば今地震が発生したとすると、何が重要かを情報として知っています。食料と水は大事で、次はエネルギーが必要です。エネルギーは、徐々に解決の方向が見えてきていますが、一方、食料と水は次の課題となります。それは、日本だけでなく、世界も同様です。食料が本当に無くなったとき、一番困るのは差し当たっての食べ物です。差し当たっての食べ物

されて、落ち着くと、今度は食べ物を産み出す仕組みを強化する必要がある。食料を援助するだけではなく、食料を産み出す仕組みをつくっていくのです。

世界には今も数々の難民問題があります。例えば、彼らが農業をすることができれば、自分たちの生活を維持し、生きがいが出てくると思います。自分の土地を離れたら、そういう生きがいの問題に直面します。人間の問題は常に基本に戻れば食べ物、そして生活、その上で自分のやるべき仕事が必要になってきます。農学が世界に果たす役割は、まだまだ大きいと思います。

さまざまなものを結ぶ農学の可能性

農学部は、食料と農業とを結ぶ、という考え方に基づいています。同時に、地方と都市、あるいは農村部と都市部を結ぶ役割も担っています。農業技術だけを増やしていくのではなく、いかに多くの国民に食物を持続的に行き渡らせるか。

そして、妥当なお金で流通できるかが、とても大事であると思います。

企業の場合には、サイエンスと企業とを結び付ける役割を、農学部は担うことができるのではないかと思っています。例えば、食物、農産物をどのように新鮮さを保ったままで保存していくか、この技術革新は大変たくさん可能性をうみだします。例えば新鮮なものをより遠くまで動かすことができるので、技術革新を起こしていくだろうと思います。

食料と農業という視点から見ると、日本は危機的な状態にあります。しかしよく考えますと、今この時代、社会を変えていき、大きく変わっていく可能性がある分野です。非常に長い間、農業や農村が、同じかたちで続いてきました。良い意味でも悪い意味でも変わらざるを得ないところに来ています。いかに知恵を出して、いかに役割を果たしていくか。社会と農学を結ぶプラットフォームとしての

役割を果たしていく必要もあります。地元の人たちが来て、何かを相談して、その後、問題を解決していくプラットフォームです。社会的な問題解決を果たしていくことも大学の役割です。

特に、地域と社会は、単に地域おこしだけでなく、経済力を発展させなければうまくいかない。農業と結び付けた産業の創設もあるうと思っています。

先ほどのデータを見ると、農学部1年目の受験生は5、127名、2年目は5、569名です。つまり、農学部には受験生が来ないというのは勝手な思い込みで、35年間どこもつくってこなかったのです。しかしこの結果を見ると農業・農学は、今一番重要な、一番大きな問題を抱えている部門として関心が高いことがわかります。自分の身体に影響のある、直接関与する問題として捉えようとしている。国民全体の食と農への関心が高いだけに、課題としては

大変大きな問題であると思います。

しかし、問題は、単純ではありません。生産量が上がれば良いとか、そういう単純な問題ではなく、大変複雑です。この複雑な問題を組み合わせて考える力を、龍谷大学農学部の子生には持つてほしいと期待しています。さらに私自身の問題意識では、日本など先進国が生き残るだけではなく、厳しい生存の問題に直面している人びとの食料や農業生産にも貢献できる学問であることです。先進国の大学で農学部のみたす役割は、多くの人びとの生活の役に立ち、貢献する農学を構築していくことでしょう。多くの大学の農学部のみ系の中にはなしえなかつたことが、この龍谷大学でできると思っています。

作物ではなく人を育てる

これから学ぶべき点や研究すべき課題は、まだ非常にたくさんあります。学生自身も学んでいる途中です。しかし、可

能性として潜在的な農業への関心が高まり、学生たちから必ずや専門的な農業者が出てくることでしょう。今までのような農村社会のシステムのままでは駄目だと思います。これからは、若い人たちが出てきたときに、それを支えてあげるような地域社会であつてほしいと思います。

農学部の一歩中心的な考えは、作物を育てるのではなくて、人を育てることがポイントです。楽しくて自分の人生が思ひ描けるような仕組みを、学問の世界、大学の世界からつくり出していく。そうすれば、必ず多くの国民が農業の大切さに気付きます。

TPPを考えることも良い機会だったかもしれないと、逆説的に考えています。TPPは、非常にシンプルに言えば、農業を完全に市場経済化しようとすることです。マー

ケットメカニズムだけで動かしていく。しかし、行き過ぎたマーケットメカニズムだけでは、食と農の問題は解決できないと思います。われわれの文明は食と農の課題を放棄することはできません。重要な社会的課題であり続けるのです。大学も一翼を担いながら、マーケットメカニズムを利用しながらも、どのように社会全体を動かして、生命と生存を支えていく仕組みをつくるのが、重要な課題だと思っています。困難な道ではありますが、学生を育てるのを楽しみながら、農学も育てていきたいと考えております。どうもありがとうございます。

(講演終了)

〈龍谷頭真会 新会員入会のお願ひ〉

宗派の僧侶で、地方自治体の首長・議員に公選された方及び経歴者で、本会に未加入の方は事務局までご連絡ください。

また、対象の方をご存知でしたら加入ご推奨いただくとともに、事務局までご連絡ください。

龍谷頭真会事務局 所務部(文書担当) 内